

原爆文学研究会報

第三七号

原爆文学研究会 二〇一二年三月

第三七回 原爆文学研究会報告

二〇一一年十二月二十五日(日)、九州大学西新プラザで開催した第三七回研究会には約三五名が参加。今回は本研究会の発足一〇周年を記念して「原爆文学研究この10年、これからの10年」というテーマでワークショップを行いました。



このテーマは本研究会の活動を中心に、この十年間の「原爆文学研究」の動向を振り返り、今後の課題を浮かび上がらせたいという意図のもと設定したものです。本会での活動期間が比較的長い会員と短い会員から合わせて五人が報告を行った後、全体で討論を行いました。

コーディネーターは川口隆行氏、報告者は長野秀樹氏・中野和典氏・松永京子氏・李文茹氏・深津謙一郎氏(報告順)です。この会報では報告の要旨に加えて、岡村幸宣氏と楠田剛士氏による研究会印象記をお届けします。

報告1 一番はじめの出来事

長野 秀樹

「原爆文学研究会」の言いだしっぺ(発起人?)の花田俊典さんは、「研究会」の発足に先立って、のちに『清新な光景の軌跡』(平14、5月 西日本新聞社)に纏められることになる評論の「西日本新聞」への連載の第一回(平7、1・31)を米国スミソニアン博物館の「原爆展」における、エノラ・ゲイ号の展示中止問題から書き始めている。また、中心となって発行していた「敍説」1期19号(平11、8月)を「原爆の表象」特集とし、巻頭に「原爆の再問題化のために」アウシュビッツ、シベリヤ、そしてヒロシマ/ナガサキ」を執筆している。共に、原爆文学研究会の発足(平13、12月)に先立って、花田さんの原爆、あるいは「原爆文学」への関心が、継続していたことを物語っている。「清新な光景の軌跡」は副題が「西日本戦後文学史」となっているが、その七五〇頁を超える浩瀚な内容が、西日本全体を広く覆うと共に、沖縄と原爆に偏ったものであることは明らかである。執筆者の問題意識がそこに現れている。

また、「原爆の再問題化のために」は、原爆の問題をアウシュビッツが語られるときの言語、あるいはシベリヤ抑留体験を語る時の石原吉郎の言葉のレベルで、もう一度語りなおさなければならないという視点で一貫している。花田さんが亡くなってから、すでに七年が経過し、「研究会」の過半は、花田さんがいなくなつてからの活動である。それは何よりも、「言いだしっぺ」の花田さんが喜んでのことだろう。会の初心の一端を、花田さんの「研究会」に先だつ、原爆に関わる論を読み返すことで、昔話としてではなく思い返したい。



報告2 機関誌「原爆文学研究」に見る本研究会の

成果と課題

中野 和典

従来の「原爆文学」研究書と本研究会の機関誌との比較を行い、本研究会のこの一〇年間の成果と今後の課題を浮かび上がらせることを試みた。

まず、本研究会の成果の一つは、従来「原爆文学」と見なされてこなかった作品に焦点を当てて「原爆文学」の問題編成の幅を広げたことであることを指摘した。機関誌で論じられてきた作品を整理すれば、本研究会が児童文学・教材・海外文学・マンガ・映画・ドラマ・絵画のそれぞれにおいて従来「原爆文学」とは見なされて来なかった作品や二〇〇〇年代に新たに成立した作品を積極的に取り上げ、それらを「原爆文学」として問題化してきたことが分かる。その一方、韻文作品の研究については手薄になっているという課題も浮かび上がった。

また、本研究会が新たな「原爆文学」観を提示していることも指摘した。例えば〈原爆文学のもっとも望ましい未来は、それがなくなる〉(長岡弘芳『原爆文学史』)といった記録性を重視する見方や「原爆文学」を〈(反核)を身体化する確実な方法〉(黒古一夫『原爆文学論』)といった政治運動の手段とする見方に対して、本研究会では「原爆文学」を〈今日的な光景の創造の場〉(花田俊典)や〈戦後日本の言説空間を構成した問題領域のひとつ〉といった今日的な状況に密接に関わる言語運用の問題として問いなおしてきた。このような「原爆文学」観は今日的な状況のありようを見る上でも重要なものだと言えるだろう。

最後に、本研究会が「成果」課題」として発信してきたことについて指摘した。領域横断的な視野の重要性(小沢節子)や「長崎原爆文学」の後日談性の積極的な意味(田崎弘章)やレトリック研究の重要性(岩崎稔)などの課題に取り組むことによって、今後「原爆文学」研究の強度を高めることができるのではないだろうか。



長崎原爆文学の10年
長野 秀樹

報告3 日米の教育現場から

松永 京子

二〇一一年四月から日本の大学でアメリカ文学を教えることとなり、原爆や核のテーマをどのように教育現場に取り入れていくことができるかについて考えてきた。今回は「原爆や核をテーマとしたアメリカ文学を、いま、日本で学ぶ意義」について考えるきっかけになればと思い、日米の教育現場で原爆／核文学を取り上げる実践例を紹介した。

まず始めに、レッド・ステイトとして知られるネブラスカ州で〈原爆を語ること〉がもたらしうる反響について、個人的な体験を基に紹介し、次にネブラスカ大学の授業で、蜂谷道彦の『ヒロシマ日記』を読んだときの学生の反応について触れた。当時(二〇〇一年以降)、ブッシュ・エイ二ー政権の対テロ戦争を擁護する風潮にあったネブラスカだが、パールハーバーや原爆投下正当論を持ち出していた学生も、原爆投下後の惨状を医師の視点から描いた蜂谷の作品に触れることで、自分たちの原爆についての知識が限られていたことに気づき、原爆に対してこれまで抱いていた考え方にも疑問を持つようになったようだ。

一方で、日本の大学におけるアメリカ文学の授業では、先住民部族の居留地が多く置かれるアメリカ南西部が、核実験、核施設、ウラニウム鉱山といった原爆や核に深く関わる場所であることに注目し、ウラニウム鉱山で働いた経験を持つアコマ・プエブロ族出身の詩人サイモン・J・オーティーズの作品を取り上げた。実は知っていると思っていた原爆について知らないことだらけだったと驚きを抱く学生もいれば、原爆／核文学の多様性に興味を持つ学生もいた。



日米の教育現場で強く感じたのは、原爆／核文学が若い読者に与える影響力の大きさである。フロアーからは、ウラニウム鉱山で働くことで「共犯者」ともなったオーティーズの複雑な核との関係など、貴重な意見を頂いた。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

報告4 台湾という場所からみた原爆と原発 李文茹

台湾では、原爆を象徴するキノコ雲の写真は、国民党の中国戦場における

中日戦争体験や、米国の参戦によって帝国日本が崩壊し台湾が解放されたという米国史観の色に染まった植民地解放物語と共にはしばしば語られるが、その雲の下に覆われた人々の経験や広島・長崎被爆者のなかに台湾出身者もいたなど、決して多く知られているとは言えない。そのなかで2011年11月、長崎市民団体の支援で「台湾被爆者の会」が結成された。報告の第一部「台湾と原爆」では、その設立記者会見で取材された施秀子氏(82歳)や王文其氏(93歳)を例に取り上げながら台湾被爆者について簡単にふれた。

「台日関係における台湾の原発」では、台湾の原発の現状と3・11以降の脱原発運動との関連について話した。建設中のものも含めて台湾の原発は全部で四基ある。台北に集中している第1、2原発は半径30キロ以内に50万人以上の都市があることで「世界一」を記録したとされるほかに、日系企業が重役を担っている別名「日の丸原発」という第4原発のことも特筆すべきだ。特に3・11以降の「脱原発」によって加速された海外への原発輸出の動きのなかで、日系原子力関連企業が構想した「原発輸出地図」に、台湾も日本との歴史的な「友好」関係を強調されつつ組み入れられているのだ。

3・11以降、台湾で大きく取り上げられる国内での原発問題といえば、第4原発の建設をめぐる論争及び低レベル放射能廃棄物処置場の設置から生じてきた先住民族の伝統地域にまつわる環境問題がある。第三部では核廃棄物処理をめぐる台湾先住民族の問題を、達悟族の「蘭嶼より悪霊を駆逐する」運動や核廃棄物処置場の建設候補地となった台東県達仁郷の現状を中心に話を進めた。



報告の最後は個人の体験から感じた「3・11」をめぐる「痛み」を話題とし話を締め括ったが、そこで考えたいのは、大事件や出来事をめぐる人たちの「痛み」と、事件と無関係の個々人が抱える「痛み」とのあいだに悲しむ「痛みを語る」優先順位があるかどうかについての問題であった。

報告5 「3・11」以降の「原爆・文学・研究」

深津 謙一郎

「3・11」が私たちにもたらした恐怖や不安の背景には、既存の物語(認識の枠組み)によっては、それがうまく意味づけられないといった点があげられるのではないか。この恐怖や不安を解消するために、私たちはそこに意味を付与し、出来事のむき出しの暴力性を和らげ、「復興」する「いま」を確かなものとして確認しようとしている。しかし、そうしたアイデンティティ確認の物語には、(あらゆるアイデンティティ確認の物語がそうであるように)排除の暴力が働かざるをえない。それはたとえば、都市と地方の格差や、原発で作業する下請け労働者の実態など、「3・11」によってあらためて顕在化された様々な差異——この差異への着目は、「かくある」現実とは違う「かくあるべき」現実、つまり、排除される者の犠牲の上に成り立つのではなく、むしろそれとの共生を模索するような新しい現実を私たちが選び直す契機でもある——を、再び「なかったこと」として隠蔽してしまう危険を有している。それゆえ、私たちは「3・11」からの「復興」の物語に対して批判的な距離を取る必要があるのだが、とはいえずそこからは、そうすることが、批判者自身を、批判する対象のメタに立つ主体として(「3・11」に起因する恐怖や不安から)切り離してしまう、という循環論をどのように断ち切つたらよいか、というあらたな問題も浮上してくる。そのひとつの解決策として、主体を立ち上げる言説が同時にそれを解体してしまう「何か」——「クリティカル・ポイント」＝危機的／(であるがゆえに)批判的な契機——を孕まざるを得ない逆説に着目し、その具体的な応用を、一九五〇年代初頭の「復興」の物語(新藤兼人『原爆の子』)に当てはめて行うことで、私たちがいま、「原爆」に関する表象のアーカイブから学ぶべき点を確認した。



機——を孕まざるを得ない逆説に着目し、その具体的な応用を、一九五〇年代初頭の「復興」の物語(新藤兼人『原爆の子』)に当てはめて行うことで、私たちがいま、「原爆」に関する表象のアーカイブから学ぶべき点を確認した。

第37回研究会印象記1

岡村 幸宣

数年前から原爆文学研究会に参加するようになり、研究会の当初の目的や意味を知らなかった私にとって、創立10周年記念ワークショップは興味深いものでした。

そもそも、なぜ文学ではない「原爆の図」の発表をさせて頂いているのか、実は本人はよくわかっていなかったのですが、この研究会が文学研究者だけではなく、さまざまな立場の人に開かれ、多様な表現を横断的に捉える場を目ざしていることが伝わってきました。

原爆という主題は、ともすれば「戦争」や「平和」という〈大きな物語〉に回収されてしまいがちです。もちろんそれを一概に悪いというのではないのですが、〈大きな物語〉は、世界を視るまなざしを硬直化させやすいように思います。しかし、その〈大きな物語〉を丹念に解きほぐしたとき、中からすくい取られる〈小さな物語〉は、硬直化した世界観を揺さぶり、想像力を刺激して、新たな可能性を拓く気がするのです。文学や絵画のような表現は、まさに〈小さな物語〉として真価を発揮する性質のもののように思います。

私が1950年代の「原爆の図」巡回展の調査に取り組んでいるのも、〈大きな物語〉として語られがちな「原爆の図」を、そこに関わった人びとの〈小さな物語〉として捉えなおすことで、これまで考えられていたものとは違う、新たな意味が浮き上がってくるのではないかと思ったからだったのだと、今さらながら気づきました。

原爆文学研究会は、私にとつて、そうした考えを整理し、刺激や発見を与えられる場であり、何より、自分が孤独ではない、同じような問題意識を持つて原爆表現に向き合っている人たちがいると勇気づけられる貴重な場なのです。本当は、そのことで皆さんに御礼を言いたかったはずなのに、ぼんやりしていて機会を逃してしまったことを、少しばかり後悔しています。

第37回研究会印象記2

楠田 剛士

研究会の開催は今回で三七回目となった。私は第二回から参加しはじめ、これまで三一回出席し、三回研究発表を行った。機関誌には十冊のうち六冊に原稿を書いた。これが多いのか少ないのか分からないが、十周年という節目のせいかわかからないと振り返らずにはいられない。今回のワークショップでも過去の研究会のやりとりが思い出された。

まず現世話人の長野秀樹氏が、前世話人の花田俊典氏の二つの論考をもとに話をした。重要なポイントとして挙げたのは「表現様式」の変化である。論じる対象だけではなくそれを論じる側も紋切り型の言葉を抜け出す必要がある。これは以前、私がルポルタージュの表現をめぐる研究発表した際にも話題に上った。紋切り型の表現を批判する表現もまた紋切り型になっていないのではないかと、だから論じる言葉はくり返し検討されなければならない。続く中野和典氏の報告はそうした問題に応じるもので、従来の原爆文学研究書と比較しながら機関誌十冊の成果と課題をまとめた。

会の後半は、松永京子氏がアメリカ体験と教育実践について、李文茹氏が台湾における原爆について、深津謙一郎氏が「3・11」後の研究のあり方について報告した。教育に関心があるものとしては、松永氏が北米先住民文学と核言説という自身の研究テーマを教室の学生と考えるために様々に工夫されていることが示唆的だった。また、松永氏が紹介したSimon J. Ortizの詩「It Was That Indian」について、高野吾朗氏が口火を切つて議論されたが、私にとつてこの場面がこの日もっともスリリングであった。普段の研究会でも一字一句にこだわった議論がおもしろい。テキストを具つぎに読んでいく。この基本姿勢の重要性は、今後の原爆文学研究でも変わりはないはずだ。

彙報

第三七回 原爆文学研究会

- 日時 二〇一一年二月二十五日(日) 一三時より
- 会場 九州大学西新プラザ中会議室
- 創立10周年記念ワークショップ「原爆文学研究」この10年、これからの10年」
- 報告1 一番はじめの出来事

長野 秀樹

- 報告2 機関誌「原爆文学研究」に見る本研究会の成果と課題

中野 和典

- 報告3 日米の教育現場から

松永 京子

- 報告4 台湾という場所からみた原爆と原発

李文茹

- 報告5 「3・11」以降の「原爆・文学・研究」

深津 謙一郎

(コーディネーター 川口隆行)

機関誌 「原爆文学研究」 第一一号原稿募集

- 書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。
- 投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一二年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。
- 発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇円を発行経費として負担する。
- 投稿宛先 〒八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室

編集後記

原爆文学研究会は二〇一一年二月に一〇周年を迎えました。これまで、さまざまな形で会にご助力いただきました皆さまに心から御礼を申し上げます。この一〇年間に開催した研究会は三七回。毎回二名以上が発表していますので、概算して七〇本以上の研究発表が行われたこととなります。そもそも「原爆文学」とは何か、というのは難しい問題ですが、とにかく「原爆文学」についての発表が七〇本以上。いつの間になんな本数になったのかと驚くばかりです。

この研究会が発足した当初、いつまで続けるのか、ということは恐らく誰もあまり考えていなかったのだらうと思います。とにかくやってみるという姿勢、悪く言えば「行き当たりばったり」の姿勢でここまで来ました。それでも会がなくならず、むしろ徐々に会員を増やしながらい〇年続いたということ自体が、「原爆文学」という問題の重大さを示しているようにも思われます。冒頭に述べたとおり、事務局の一員として会にご助力いただいた方々には深く感謝しておりますが、この会の一〇周年は、祝うべき性質のものではないということも感じております。

一二月の研究会では、研究会のあり方そのものに見直しを求める意見も出ました。緊張感を失わず、この会に集う人々の力を上手く発揮できるように、改善すべき所を改善していきたいと考えています。この会報をお読みの皆さまからも本研究会に対するご意見などいただければ幸いです。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>